

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

文・撮影●波多利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>(E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

「HP95LX」の周辺機器と 「HP1000CX」

🌀 Made in OKINAWA???

今回の前フリは、前回に引き続きラジオについてである。今回はST管という大きな真空管を使用した木製筐体のラジオのご紹介したが、今回はポータブルタイプのトランジスタラジオだ。と、こう書いてはみたものの、筆者はこの手のトランジスタラジオを真剣にコレクションしていたわけではない。今までは、まあ何となく気に入ったデザインのものを集めていたという程度であった。

ところがある日、例によって筆者の悪友であり流しの整備士でもあるRandy氏がやってきて、金に困ったので収集したラジオを買取ってくれと言う。筆者とて同じく金の無い身の上、とても買取れるような状況ではなかったのであるが、Randy氏が見せてくれたトランジスタラジオを見るや否や無条件にOKしてしまった。というのも、氏が出してきたトランジスタラジオとは、1960年代後半の製品と思われるヴィンテージモデルであったのだ。しかも、メーカー名を見てぶったまげた。ナント！あのAmigaコンピュータで有名なCOMMODORE製のものであったのである！ COMMODOREといえば、Amigaコンピュータを出す前は数多くの電卓を発売していたのであるが、そのさらに前には、このようなトランジスタラジオを作っていたというのだ。ちなみに、これらのラジオの内部には、回路図に加えて下記のような記載がある。

COMMODORE IMPORT CORP.
507 FLUSHING AVENUE BROOKLYN
10005, NEW YORK.

しかし、Randy氏は以前からCOMMODOREのヴィンテージ電卓を収集するという、まあ、普通の人ならばまずやらない、かなり濃い目の趣味に走っていたのであるが、まさかラジオまで手を伸ばしていたとは思わなんだ。それはさておきこれらのラジオたち、どれもデザインが非常に素晴らしい！ 写真は筆者がRandy氏から購入したトランジスタラジオの揃い踏みである。全部で7台あるが、なぜか1台だけGeneral Electric製のものが紛れ込んでいる (A)。

当時のポータブル型トランジスタラジオはAM放送しか受信できないものがほとんどであったが、こうして眺めてみると、レトロなデザイン、ポップな配色など、現代でも十分通用するものばかりである。今回はその中でも筆者お気に入りの2製品をご紹介します。

まず、COMMODORE製トランジスタラジオの中でも、かなり古いものと思われるMODEL #600という製品。これは6石のトランジスタラジオである。寝ぼけた青色のプラスチックケースにクロームメッキのパネルの取り合わせが素晴らしい。このラジオは単三電池2本で駆動する。製造は日本製。内部を見てみると、懐かしいディスクリート部品のオンパレードだ。使用トランジスタには日立製2SA152、2SB155、2SB156等が見受けられた。どれもTO-3と呼ばれるメタルパッケージである (B、C)。

お次も6石のトランジスタラジオ、MODEL TW-60。アイボリーホワイトのケースに銀色のちっちゃな正方形を配したデザインが、いかにも70年代していてなかなかグッド！ 赤文字のロゴもオシャレである。電源は昔の電卓等で良く使用された006P (9V) 乾電池。使用トラン

TRANSISTOR RADIO

▲6台のCOMMODORE製ラジオに1台のGeneral Electric製ラジオを並べたところ。それぞれのモデル名称は、上段左側からTW-60、TW-66、TW-100。下段左側から600、P175B、70T、120

ヴィンテージ
トランジスタラジオの
揃い踏み



COMMODORE
MODEL
#600



Ⓐ 古色蒼然としたデザインが今見ても美しい傑作機。6石トランジスタラジオで中身は日本製

Ⓑ 懐かしいディスクリート部品で構成されたラジオ内部。使用されているトランジスタは、TO-3と呼ばれる古風なメタルパッケージ製品だ。誌面ではお伝えできないが、漂う電子部品の匂いが良い!

COMMODORE
MODEL
TW-60



Ⓒ 実にオシャレ! 実にポップ! これが30年以上前の製品とはとても思えない。オースチン・パワーズファンのアナタにはびったりのラジオ!

Ⓓ これが問題の「Made in OKINAWA」の表示。沖縄製を強調したかったのはわかるんだけどねえ……

ジスタはNEC製2SB111、2SB98、2SA286、2SB117等である。そしてこのラジオ、ケース表面には「Made in OKINAWA」の刻印が……。この表記には我ながらぶつとんでしまった (D、E)。

というわけで、今度はトランジスタラジオ収集に走りそうになってきた波多利朗であるが、まあ真空管ラジオよりは場所も食わないし、実害は少ないかな? などと勝手に納得してしまっている。困ったもんだ……。

HP95LXに 周辺機器をつなごう!

というわけで、先を急ごう。

前回の本コーナーでは、HP95LXの概要と各種日本語化ソフトについてご紹介した。HP95LXについては筆者の思い入れも深いため、ついつい筆が進んでしまい、またどうでもいい前フリ記事までしっかりと書いてしまっ

た結果、校正の段階で簡単にページ数がオーバーになってしまった。というわけで、今号は前回ご紹介できなかったHP95LXに周辺機器をつなぐお話から始めることにしよう。

HP95LXには、今見てもかなり面白い周辺機器がいくつか用意されていた。筆者宅には専用外付けFDDであるDrive95と、専用品ではないが同じHPの赤外線プリンタHP82240Bがあったので、さっそくこれらを使ってみた。なお、HP95LX専用のドッキングステーションなんていう物も存在したが、極めて少数しか出回らなかった激レア品であり、さすがの筆者もこればかりは持っていない。

1. Drive95をつなぐ

Drive95は米Sparcomが作成したシリアルインターフェース経由で接続するHP95LX専用のFDDである。このSparcomは、HP95以外にも携帯端末関連の周辺機器を製造している会社として、その手の携帯端末オタクには

001



Drive95の外観

黒い弁当箱のようなFDドライブ、Drive95の外観。ニッカド電池を内蔵しているので、持った感じもずっしりと重い。モバイル環境で利用できる設計にはなっているが、これを持ち歩くのは覚悟が必要だ

002



Drive95とHP95LXを接続したところ

専用のケーブルを用いてHP95LXにDrive95を接続する。たかだか1FDDの製品なのにこんなに大きいのは、ニッカド電池を内蔵しているため。開けてみるとわかるが、Drive95の内部はスカスカである（って普通開けないと思うけどね）

有名な会社だ（001）。

ところでDrive95であるが、一応HP95LX専用の周辺機器と書いたのだが、実はIBM PC互換アーキテクチャ採用のマシンであれば別にHP95LXでなくても使うことができる。現に筆者はこのドライブをME386等の謎ば〜機に接続した経験がある（002）。

さてこのDrive95、かなりでかくて重い。これは本体内部にニッカドバッテリーを搭載しており、電源の無いところでも使用可能になっているからである。モバイル機器に接続するのだから本体も電池駆動という仕様は理解できるのだが、こう大きくてはかなわんなあ。

本体背面には9ピンオスのシリアルコネクタとACアダプタ接続コネクタが付いている。余談であるが、実は今回Drive95を久しぶりに使おうとした際、専用のACアダプタを紛失してしまったことに気がついた。かなりあせったのであるが、ACアダプタを接続するところを見ると「Power Input 9-18V AC/DC」と書かれている。普通ACアダプタ接続部分には、コネクタの極性等が記載されているのだが、そのような記述が無いどころか、ACでも使用可能なようなのだ。試しにころがっていた内側がマイナス極性を持つ9Vのアダプタを接続してみたところ、問題なく使用できた。この辺の電源対応は、かなり良くできていると言えるであろう（003）。

Drive95とHP95LX本体とは、HP専用のPC接続ケーブル（F1015-80002）を用いる。このケーブルはHP100/200LX用として販売されているもので、本体接続側コネクタが2列10ピンの配列となっているため、付属のコネクタ（5181-6643）を使って95LXの1列4ピン配列に変換して使用する。

Drive95を使用するためには、専用のドライバを組み込む必要がある。ドライバのファイル名称は「DRIVE95.

SYS」で、HP95LXの内蔵RAMドライブにファイルをコピーしてconfig.sysの最後の部分に下記を記述するだけでよい。

```
DEVICE=C:\DRIVE95.SYS
```

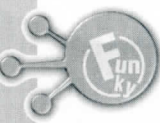
マシンをリポートすると、下記メッセージが出力されドライブが組み込まれる。なお、筆者のマシンではDrive95はGドライブとして組み込まれている。

```
Drive95 Floppy Disk Device Driver
Version 4.0 of Nov 20 1992 11:43:01
Copyright (C) 1991 Sparcom Corporation.
All rights reserved.
Installed as drive G:
Options: Lo = 9600 Hi = 57600
```

あとの使い方は実に簡単で、通常の論理ドライブとしてファイルをコピーしたりできる。ただし、ドライブとのあいだは9600ボーという低速シリアル接続となっているので、ファイルのコピーには呆れるほど時間がかかる。まるで古のパソコン通信でファイルをダウンロードするような感じであると言えば、おわかりになるであろう。

ファイル操作に時間がかかるものの、HP95LXにFDDが付くのは意外に便利である。他のIBM互換機系謎ば〜機にも接続可能であるため、携帯端末用のアクセサリとしては優れたものであると言えるであろう。ただし他のマシンで使用する場合には、ケーブルに注意しなくてはならないけどね（注：クロスケーブルを使用のこと）。

なおDrive95であるが、内蔵のニッカド電池が完全に充電できていないと使えない。普通放電しきっていてもACアダプタを挿せば使えそうな気がするものだが、コイツは違う。筆者が所有するDrive95は今から9年も前の製品であり、ニッカド電池が粉をふいてへたっていたため、かなり長時間充電しないと起動できなかった。なお、内蔵ニッカド電池は簡単に交換可能なので、そのうちに換





003 Drive95の背面コネクタ部

Drive95背面にはタピンオスのシリアルコネクタとACアダプタ接続用端子が配置されている。モバイル用の製品らしく、電源のないところでもFDDを使用することが可能である



004 HP82240B赤外線プリンタの外観

電池でもACアダプタでも駆動できる赤外線プリンタ。記録には感熱紙を使用する。印字速度は遅いものの、手軽にバームトップの画面を印刷できるメリットは大きい

えてらやねばならんなあ……。

2. 赤外線プリンタをつなぐ

HPの赤外線プリンタHP82240Bは、専用の常駐ソフトを用いることで、HP95LXに接続することが可能だ。この場合、HP95LXの「PR TSC」キーを押すことで、HP82240Bプリンタに画面イメージをプリアプリとプリントアウトさせることができる (004)。

さてそのHP82240Bプリンタは、元々HP製電卓のプリンタとして作られたものだ。電源は単三乾電池4本もしくはACアダプタを使用しインターフェースは赤外線となっている。いわゆる熱転写プリンタであり、記録紙としては幅が56mmの感熱紙を使用する。

HP82240BをHP95LXで使用するためには、専用のデバイスドライバが必要である。このドライバは「IRPR TSC.COM」というファイル名のTSRプログラムで、AUTOEXEC.BAT内に設定する。本ドライバは、確かCompuServeから落としてきたような記憶があるのだが、どこから持ってきたのか忘れてしまったわい……。なお、IRPR TSC.COMはHPが1991年に制作したプログラムで、フリーで配布されていたものだ。

ドライバの組み込みは、下記の要領で行う。

●config.sys中の記述を確認する。

config.sys内に、下記の記述があることを確認する。

```
shell=c:\command.com /P /E:512
```

●autoexec.bat中にドライバを記述する。

autoexec.bat中にirprtsc.comを記述する。この場合、注意することは必ずシスマネ (\$sysmgr) の前に組み込んでおくことだ。記述は簡単で、たとえばドライバをtoolsディ

レクトリにコピーした場合には

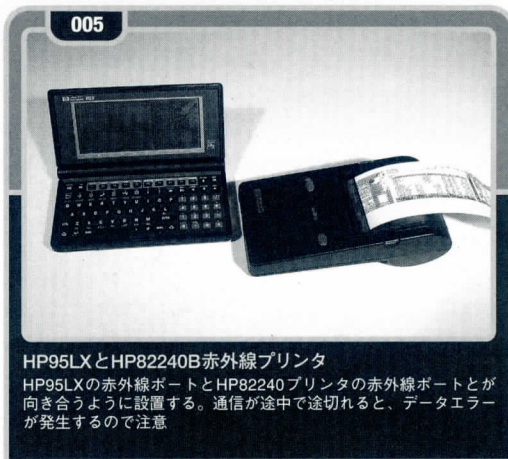
```
c:\tools\irprtsc
```

となる。

以上でHP95LXをリポートさせれば、ドライバが組み込まれた状態となる。次にHP95LXのシスマネ側での設定を行う。

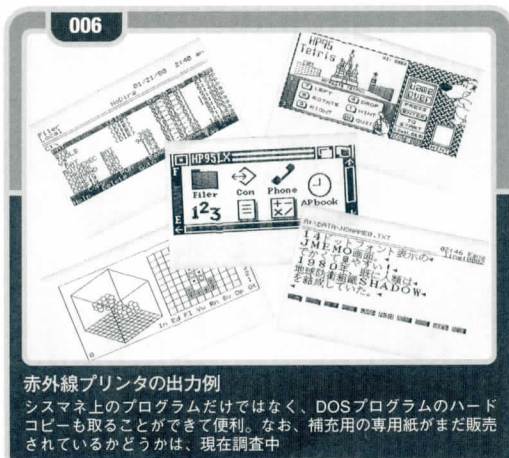
まず、SETUPを起動させPrinterの設定に入る。ここでConfig→Interfaceを選択し、「3 (Infrared)」に設定する。これでプリンタとして赤外線プリンタを選択したことになる。後はHP95LXとHP82240Bの赤外線ポートを向かい合わせ、プリントさせたい画面をHP95LX上に表示させておき、「PR TSC」ボタンを押せば、プリンタがジーコジーコと画面を印刷するという仕掛けである (005)。

要は単純な画面のハードコピー機能なのだが、ちょっとしたメモを印刷する際にとても便利で楽しい。もちろん、シスマネ上のプログラムのみならず、DOS上からで



005 HP95LXとHP82240B赤外線プリンタ

HP95LXの赤外線ポートとHP82240プリンタの赤外線ポートとが向き合うように設置する。通信が途中で途切れると、データエラーが発生するので注意



赤外線プリンタの出力例

シスマネ上のプログラムだけではなく、DOSプログラムのハードコピーも取ることができて便利。なお、補充用の専用紙がまだ販売されているかどうかは、現在調査中



HP82241AJ ACアダプタ

1992年にHP95LX専用品として発売されたACアダプタ、HP82241AJ。後に出てくるF1011Aと比較すると、大変ゴツくて重い

もプリントアウトすることが可能だ。このグッズは遊べる！ 超旧型携帯端末の画面のハードコピーが、赤外線インターフェースでプリンタから出てくる様子を見るのは、なかなか痛快だ！（006）この赤外線プリンタがまだ入手可能かどうかは不明だが、持っておられる方は是非試してみてください。

3. 当時モンのACアダプタを発見

次は周辺機器ではないが、HP95LX専用のACアダプタである。HPLX用のACアダプタとしては、現ユーザにはF1011Aがお馴染みであるが、今回ご紹介するアダプタは型番がHP82241AJというものである。Jの文字からもわかるようにJapan仕様となっている。このACアダプタはHP95LXのほかにも、HP82240A/B Infrared Printer とHP2225C/D ThinkJet Printerに使用することができる。なお製造は92年15週、台湾製である。

パッケージの中には、1987年3月に印刷された日本語の取り扱い説明書と1986年8月に印刷された英文版の重要事項説明書が入っていた。入力AC100V（50/60Hz）、出力DC9V（13.5VA）となっている。外観上はどうってことのないACアダプタではあるが、HP100LX等で使用するF1011Aと比較して、非常に大きくかつ重い。まるでノートパソコンのACアダプタのようである（007）。

HP1000CXとは何ぞや？

前回ちょっとご紹介したが、HPLXシリーズにはHP1000CXという型名のマシンが存在した。とはいっても、幻のマシンでも何でもなくて、本誌読者のようなマニアの方には有名な製品である。しかし、他のHPLXと異なりHP1000CXは販売ルートが特殊であったことから、

実際に所有して使っておられる方は比較的少ないのではないと思われる。今回良い機会でもあるので、簡単にこのHP1000CXなるマシンをご紹介しておくことにしよう（008）。

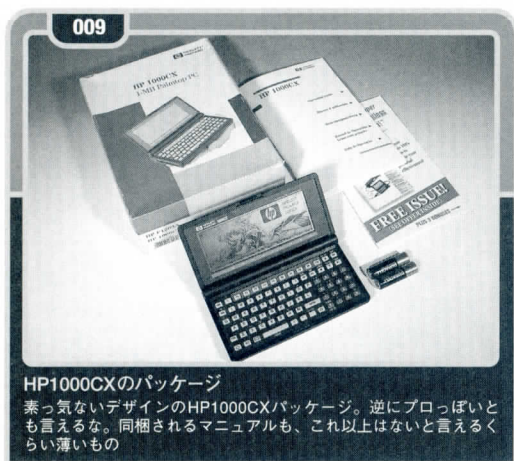
前号でも触れたが、HP1000CXは基本的にはHP100LX/HP200LXと同じアーキテクチャなのであるが、内蔵ROMにHPの特徴であるPIMが入っていないという決定的な違いがある。このマシンは一般コンシューマ向けの製品ではなく、サードパーティがPCカードドライブに専用のソフトウェアを付加した形で販売するために作られたものであった。従って基本的には法人相手の販売形式しか取らなかったようであるが、一般のコンピュータショップにも出回ったことがある。今回ご紹介する物も、こうしたルートから入手したものである。

読者の中には「HPLXの特徴ともなっていたPIMを取り去ったマシンなんて……」と思われる方もおられるかもしれない。確かにHPLXシリーズに内蔵されているPIMは非常に良くできている。しかし、内蔵PIMを使わない



HP1000CXの外観

外観はHP100LXとほとんど変わらないHP1000CX



人や、汎用のCGA/DOSアプリケーションのみしか走らせない人にとっては、PIMは内蔵ROMの無駄使いといってもよいであろう。こうした用途にはHP1000CXが最適だ。なんてたって、これ以上ないくらい純粋な、CGA/DOSマシンなのだから。

🔧 HP1000CXの概要

それでは、さっそくHP1000CXのハードウェア構成を見てみよう。まずパッケージであるが、基本的に企業相手の製品だけあって非常に素っ気ない。HP100LXなどが綺麗に印刷された箱に格納されているのに対して、HP1000CXの箱は「まんまバルク品……」。ホント、そこらへんのショップで販売している在庫処分のバルク品と変わらないと言ったら言い過ぎだろうか？ まあ、パームトップは外箱で買うもんじゃないから、別にいいんだけどね (009)。

簡素なのは外箱だけではない。マニュアルも非常に薄

いものが1冊同梱されているのみである。内蔵PIMがないため、HP100LXのような分厚いアプリケーションマニュアルが付属しないのは当然としても、このマニュアルには本当に必要最小限のことしか書かれていない。しかも、5カ国語共通という仕様なので、各言語15ページ程度のものだ。

製品にはマニュアルと単三アルカリ乾電池2本、CR2032ボタン電池1個及びケース裏面に添付するネームプレートのみが付属する。この愛想のないパッケージが、いかにもプロっぽくて良いな……。

さて、HP1000CXの外観であるが、ほとんどHP100LXと変わらない。2つを並べると、まるで漫画の間違い探しをしているほど良く似ている。本体上部のエンブレムが異なるのは当然として、あとはキーボードが違う程度である。余談だが、各HPLXシリーズの製品番号は、それぞれ下記の通り (010, 011)。

HP100LX (2MB版)	F1022A
HP200LX (2MB版)	F1061A
HP1000CX (1MB版)	F1203A

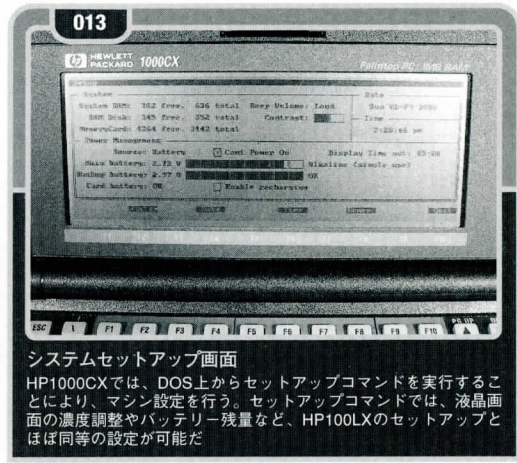
筆者が所有する1000CXは1995年1月製造品。シリアル番号はSG53703307である。一方HP100LXのシリアル番号はSG42001045であった。ちなみにどちらもシンガポール製である。

HP100LXとの相違はキーボードにある。内蔵アプリケーションが削除されているため、HPLXの特徴であったアプリケーション起動キーが全て無くなっているのは当然である。キー配列は基本的に同じであるが、上から2列目のキー定義が異なっている。HP100LXでは、内蔵PIMの起動キーとして定義されていたものが、1000CXでは記





HP1000CXとHP100LXのキーボード
 両者の相違はキーボードを見ると明確。内蔵PIMが省略されている1000CXは、キーアサインが異なる



システムセットアップ画面
 HP1000CXでは、DOSからセットアップコマンドを実行することにより、マシン設定を行う。セットアップコマンドでは、液晶画面の濃度調整やバッテリー残量など、HP100LXのセットアップとほぼ同等の設定が可能だ

号キーに割り付けられている。テンキーがあるため、通常の英語キーボードのように数字キーは割り振られておらず、シフトキーを押さずにダイレクトに記号を入力することが可能だ。この点はなかなか便利とも言える (012)。

一番下の列、スペースバーの3個右隣のMENUキーがブランクとなっている。また、.、=、+にFn機能として割り付けられていたCUT、COPY、PASTE機能も削除されている。下から2列目、ZキーからMキーにかけて割り付けられている機能も1000CXでは削除されている。

こうした機能面での違いはあるものの、一見した感じでは100LXとほとんど変わらないキー配列に見える。

液晶画面の右側には、100LXにはLotus 1-2-3とccMailのロゴが印刷されているが、これも当然削除されている。

ACアダプタはHP100LX/200LXと同様に、F1011Aが使用できる。

HP1000CXの動作

それでは、HP1000CXの動作について見てみよう。システムの起動はHP100LXと同じである。システム起動時にALTキーを押すことによって、ちゃんとBOOTオプション画面に入るところも同様だ。

HP100LXと異なる点は、その後DOSプロンプトが表示されることである。この状態では、カードサービス、ソケットサービス共にインストールされているので、PCカードドライブにフラッシュメモリーカードを入れればちゃんとカードの内容を認識させることが可能である。

さて、HP100LXなどには内蔵PIMのSETUPを用いて、液晶画面の濃度調整やスピーカの音量等を調整していた。それでは、内蔵PIMが省かれたHP1000CXではどうする

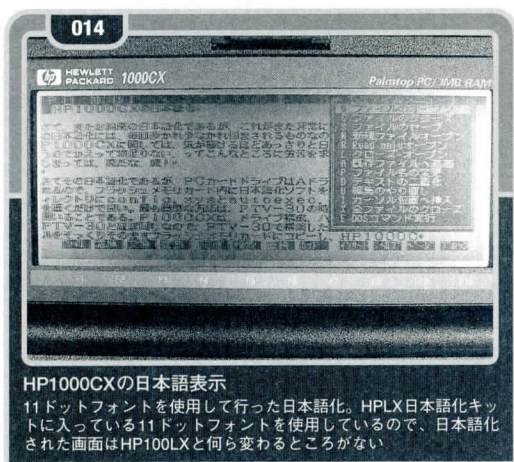
のか? という素朴な疑問が生じるであろう。HP1000CXでは、マシンの基本的なセットアップ機能として、DドライブのBINディレクトリにSETUPコマンドが用意されている。SETUPコマンドを起動すると、System、Date、Time、PowerManagementの4つの設定画面が現れる (013)。

Systemの項目では、内蔵RAMディスク容量の設定、ビープ音の設定、液晶画面のコントラスト設定が行える。液晶画面のコントラストは30段階程度にきめ細かく設定できる優れたものだ。

PowerManagementの項目では、Com1ポートOn/Off設定、液晶ディスプレイのタイムアウト時間設定等が行える。ここでは、メインバッテリーとバックアップバッテリーの残量もグラフと数値で確認することが可能だ。なおこのSETUPプログラムは、後述する日本語環境下でも問題なく使用できる。

筆者が所有するHP1000CXの内蔵RAMメモリは1MB。上述したSETUPコマンドのSystem項目を使用して、この1MBの内蔵RAMメモリを、システムRAMとRAMディスクに割り振って使用する。筆者のマシンではシステムメモリとして636KB、RAMディスクとして352KBに設定した。

次にHP1000CXのドライブ構成について見てみよう。PCMCIAカードドライブはAドライブとして認識される。内蔵ドライブにはCとDが構築されている。CドライブはRAMディスクで、容量設定はSETUPでの設定に従う。DドライブはROMディスクとなっており、360448byteの容量がある。DドライブにはDOSとBINディレクトリがあり、基本的なDOSコマンドとLapLink等のアプリケーションソフトがインストールされている。なおDOSのバージョンは5.00である。



HP1000CXの日本語表示

11ドットフォントを使用している日本語化。HPLX日本語化キットに入っている11ドットフォントを使用しているため、日本語化された画面はHP100LXと何ら変わるところがない



HP1000CX上でDERIVEを動かす

数学マニアにはお馴染みの計算ソフト「DERIVE」をHP1000CXで走らせたところ。画面はPLOT3Dのメニュー。英語モードに移行させてから使用する

HP1000CXの日本語化

さて、またお約束の日本語化であるが、これがまた非常に簡単だ。謎ば〜機の日本語化には、毎回多かれ少なかれ悩まされるものなのであるが、ことHP1000CXに関しては、気が抜けるほどあっさり日本語化できてしまうのでかえって物足りない、ってこんなところに労苦を求めようになってしまうとは、魔だな、魔！

さてその日本語化であるが、PCカードドライブはAドライブとして認識されるので、フラッシュメモ리카ード内に日本語化ソフトを格納し、ルートディレクトリにconfig.sysとautoexec.bat両ファイルを置くだけでよい。最も簡単な方法は、PTV-30のときに使用した設定を用いることである。P1000CXは、ドライブ構成、ハードウェア構成がPTV-30とほぼ同じなので、PTV-30で構築した日本語環境ファイルをそっくりそのままフラッシュメモ리카ードにコピーし、HP1000CXのPCカードドライブに差し込めば、即日本語を表示することができる (014)。

せっかくHPのパームトップを日本語化するのであるから、今回はHPLX日本語化キットに入っている8、11、16ドットフォントを使用して日本語環境を構築してみた。ちなみにFEPはWX2も刀もOKだ。以下に、Aドライブのルートディレクトリに置いたconfig.sysとautoexec.batファイルの例を示す。当然といえば当然のことであるが、日本語化キットのフォントを用いて日本語化したHP1000CXの画面は、日本語化したHP100LXのそれと変わるところはない。

config.sysファイルの例 (FEPとしてWX2を使用した場合)

```
buffers=20
files=30

device=a:\dos\fontman.exe -d -fa:\dos\fontman.ini
```

```
device=a:\dos\yadc.exe -b+ -bd -v70 -h11

device=a:\dos\kkcfunc.sys
device=a:\dos\yansi.sys

device=a:\wx2\wxk.sys
device=a:\wx2\wx2.sys /Da:\wx2\wx2.dic /VF /N
```

config.sysファイルの例 (FEPとして刀を使用した場合)

```
buffers=20
files=20

device=a:\dos\fontman.exe -d -fa:\dos\fontman.ini
device=a:\dos\yadc.exe -b+ -bd -v70 -h11

rem device=a:\dos\kkcfunc.sys
device=a:\dos\yansi.sys

device=a:\ktn4\ktn4.sys /F=A:\KTN4\KTN4.CFG
device=a:\ktn4\ktn4c.sys /F=A:\KTN4\KTN4.CFG
```

autoexec.batファイルの例

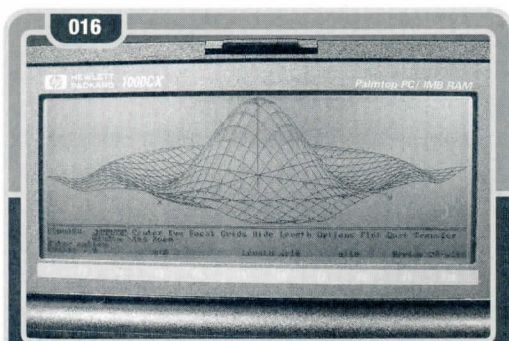
```
@echo off
prompt $p$g

set temp =a:\temp
set tmp =a:\temp
set dmail=a:\dmail
set wattcp.cfg=a:\dmail\bin

path=a:\bat;a:\vz;a:\dos;a:\bin;a:\dmail\bin;a:\ktx;c:\;
```

処理速度はどれくらい？

1995年当時のパームトップパソコンがどの程度の処理能力を持っていたのかを把握するため、簡単なベンチマークテストを実施してみた。使用したソフトは、当時は一般的なベンチマークテストであったCPUBENCHとDBENCHである。



DERIVEの計算結果例

DERIVEのPLOT3Dで結果をグラフィック表示させたところ。CPUパワーが非力であるため、この解像度での計算はさすがに時間がかかる。しかし、7.91MHzの80C186でここまで計算できるのは、さすが



ゲーム端末「PIECE」上で動く日本語エディタ

「マシンあるところ日本語エディタ有り」というわけで、どんな変態マシン上でも日本語エディタを作ってしまう廃人「柴隠上人 稀瑠冥間守 (Kerberos)」氏が制作した、PIECE用日本語エディタ。画面は開発中のものである

HP1000CXのCPUは80C186 (7.91MHz) なので、結果は期待できそうになかったのだが、全くその通り。タハハである。それはそれとして、ベンチマーク結果が初代PC9801の2.4倍であるとか、PC9801DAの0.19倍であるといった結果は、妙に懐かしくなっていいもんだね。そういえば、当時PC9801DAにメモリを増設し、100MB程度のハードディスクを付けたら47万円程度したものだ……。

さて、ベンチマークテストばかりやっていたのではつまらないので、アプリケーションソフトを動かしてみた。使用したソフトは、軽量の数式処理ソフトとして、数学ヲタクな人には有名は「DERIVE」である(015)。

DERIVEをHPLXで使用されている方は多いと思われる。操作は若干大変だが、複雑な計算式の演算結果を3次的に表示することができるなど、非常に優れた機能を持ったソフトウェアだ。Deriveは英語モードにスイッチさせてから起動する。ここでは比較的処理が重たいと思われるPLOT3D機能を使用し、演算結果を3次的に表示させてみた。

さすがに処理には時間がかかるものの、これだけのリソースでここまで計算できるのはさすがだ。古いマシンとはいっても、まだまだ使えるものだ (016)。

DBENCHの結果

```
Dhrystone Benchmark 300000 loops...
Copyright(c)1992 ASCII Corp. and Tadatashi Hirono
Execution time 352 second
      852.27 dhrystones/second
PC-9801DA2(386/20M) ratio 0.19
```

🕒 おわりに

今年もまた4月2日がやってくる。1999年4月2日にPC WAVE誌が廃刊となって、はや3年。月日の経つのは本当に早いものだ。こうして当時は振り返り思い起こすことと言えば、取り損ねた原稿料のこと……、もとい!

当時のDOS/Vマニアの熱狂と廃人たちのパワーである。^^;;しかし、当時筆者がPC WAVE誌に寄稿していた記事は、かなりハチャメチャだったな……、って今も本誌にハチャメチャな記事を書いているってか?? ^^;;

さて、本誌冬号でも紹介されていたアクアプラスのゲーム端末「PIECE」であるが、現在某廃人により日本語でメモが取れるテキストエディタの開発が粛々と進められている。その某廃人の名前とは、かのPC WAVE誌上の筆者の連載でも度々登場した「柴隠上人 稀瑠冥間守 (Kerberos)」氏。ゲーム専用端末で日本語エディタを作ってしまうとは、氏の偏屈な性格が垣間見えて面白い。画面は開発中のものであるが、あのPIECEのユーザーインターフェースを用いていかにして日本語を入力するのか、なかなか興味深いものがある。順調に行けば次号の本コーナーでご紹介できるかもしれないので、お楽しみに(017)。

CPUBENCHの結果

```
80X86 CPU Speed TEST v0.980 Copyright 1992 Z0Bplus Hayami
DHRYSTONE 30000 LOOPS
Execute memory area: 5000:0000 ->5000:1C28
CPU Type: 80186 Not FPU
```

```
Ratio to the first PC9801 : 2.40
Execute time : 28.72 sec.
```